

令和 7 年度
全国学力・学習状況調査

結果及び分析



伊勢原市公式イメージキャラクター
クルリン

伊勢原市教育委員会

令和7年度 全国学力・学習状況調査の伊勢原市結果の分析について

伊勢原市教育委員会

伊勢原市では、児童生徒の学力や学習状況に関し、継続的な検証改善サイクルの確立を目的として、文部科学省「令和7年度 全国学力・学習状況調査」を実施しました。

伊勢原市立小中学校の調査結果の概要をお知らせします。

【調査日時】 令和7年4月14日(月)～17日(木)

【調査対象学年・参加人数】 小学校6年生 725人 中学校3年生 654人

【調査内容】

1 教科に関する調査

- ・小学校:国語、算数、理科 中学校:国語、数学、理科
- ・出題範囲:調査する学年の前学年まで
- ・出題内容:「知識・技能」及び「活用」に関する問題を一体的に出題
- ・出題形式:記述式の問題を一定割合で導入

2 児童生徒に対する質問調査、学校に対する質問調査

【調査結果についての留意事項】

- 実施教科が国語、算数・数学、理科の3教科であり、学習指導要領のすべてを網羅するものではないことから、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であること。
- 年度によって問題の質が異なるため、平均正答率の経年変化のみから、学力の向上、低下の傾向を評価することは難しいこと。

1 教科に関する調査の結果から

(1)平均正答率

小中学校共に、全国及び神奈川県と比較して、正答数・正答率と大きな差は見られませんでした。

《令和7年度 教科に関する調査の平均正答数と平均正答率(%) (公立小中学校)》

令和7年度	小学校調査						中学校調査					
	国語		算数		理科		国語		数学		理科	
	(14問)		(16問)		(17問)		(15問)		(16問)		(26問)	
	正答数 (問)	正答率 (%)	IRT スコア									
伊勢原市	9.2	66	9.0	56	9.6	56	7.8	56	7.7	52	525	

※市の平均正答率は、国から小数第1位を四捨五入した整数値で提供されています。

※「IRT」とは、正答・誤答が、問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童・生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童・生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと。

※「IRT スコア」とは、IRT に基づいて500を基準にした得点で表すもの。

(2)教科・設問ごとの分析結果

教科に関する調査結果について、各教科・設問ごとに分析したところ、習得の状況が良好であると見られる特長と指導の改善・充実が求められる課題が見られました。

小学校各教科の主な特長と課題

小 学 校	国 語	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づくことができる。 ・自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・情報と情報との関連付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。 ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけることができる。
	算 数	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・角の大きさについて理解している。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として、捉えることができる。 ・目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。 ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できる。
	理 科	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いている。 ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができる。 ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いている。 ・乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いている。 ・発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができる。 ・レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができる。

中学校各教科の主な特長と課題

中 学 校	国 語	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事象や行為を表す語彙について理解している。 ・ 目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたい事を明確にすることができる。 ・ 文章全体と部分との関係に注意しながら登場人物の設定の仕方を捉えることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文脈に即して漢字を正しく使うことを理解している。 ・ 資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。 ・ 文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができる。
	数 学	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必ず起こる事柄の確率について理解している。 ・ 事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 素数の意味を理解している。 ・ 一次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合を基に、x の増加量に対する y の増加量を求めることができる。 ・ 式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができる。 ・ ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができる。
	理 科	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な電化製品の電気回路について探究する学習場面において、回路に抵抗がついている理由を問うことで、抵抗に関する知識が概念として身に付いている。 ・ 気圧に関する身近な事象を問うことで、気圧の知識が概念として身に付いている。 ・ スケッチから分かることを問うことで、スケッチに関する知識及び技能が身に付いている。 ・ ガス警報器の設置場所が異なる理由を考える学習場面において、実験の様子と、密度に関する知識および技能を関連付けて、それぞれの気体の密度の大小関係を分析して解釈できる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いている。 ・ 塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いている。 ・ 【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できる。 ・ 化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができる。

※上記の各教科の課題を踏まえた方策については、p. 10～11（「4 学校がよりよい授業実践に向けて重視していきたいこと」）に示してあります。

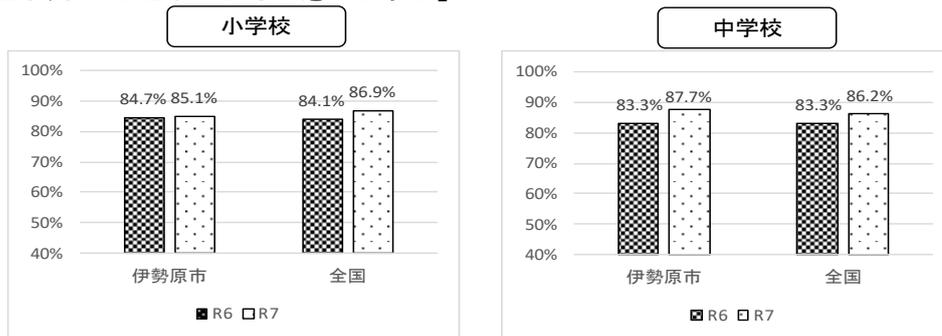
2 児童生徒質問調査の結果から

* 各グラフの数値は、質問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した児童生徒の割合を示しています。

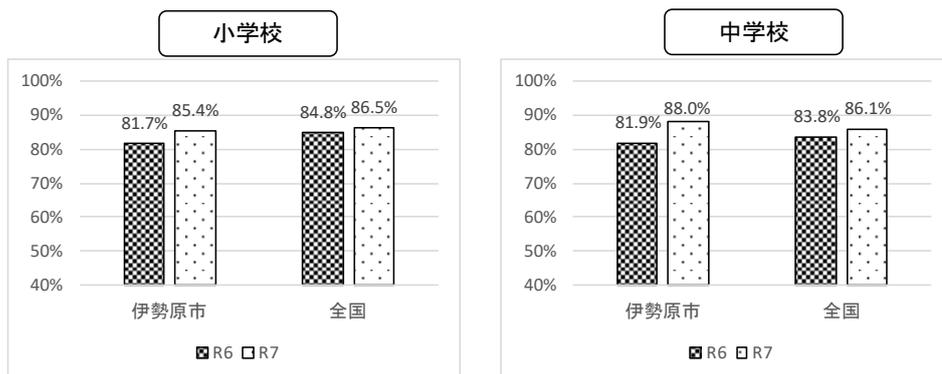
(1) 児童生徒の生活に対する意識に関して

- ・「自分にはよいところがある」と感じている児童生徒の割合は、昨年度から小学校では0.4%、中学校では4.4%増加した。また、「学校に行くのが楽しい」と感じている児童生徒の割合は、昨年度から小学校では3.7%、中学校では6.1%増加した。
- ・一方で、1～2割程度の児童生徒が「自分にはよいところがある」「学校に行くのが楽しい」と感じていないことを踏まえ、これからも引き続き、日ごろからの教職員のあたたかな声かけなどを通して、児童生徒のよさや可能性を積極的に認めるとともに、児童生徒がお互いを認め合える授業づくりや学級づくりに取り組んでいくことが大切である。

Q「自分には、よいところがありますか」

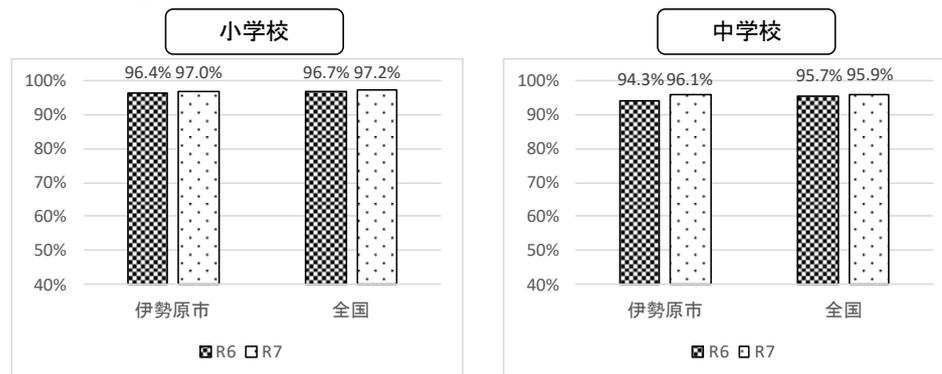


Q「学校に行くのは楽しいと思いますか」



- ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」と回答している児童生徒の割合は、昨年度から小学校では0.6%、中学校では1.8%増加した。「どちらかという当てはまる」と回答した児童生徒の割合は昨年度から小学校で0.8%、中学校で0.6%減少したが、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が、昨年度から小学校では1.4%、中学校では2.4%増加した。
- ・「いじめはどんな理由があってもいけないこと」という認識を高める取組については、引き続き、日ごろの学校生活の中で、児童生徒の発言や行動に目を配り、冗談やふざけの場面であっても、受けとめた児童生徒が、心身の苦痛を感じている内容になってないかどうか十分に注意を払い、個に応じて指導していく必要があると考える。

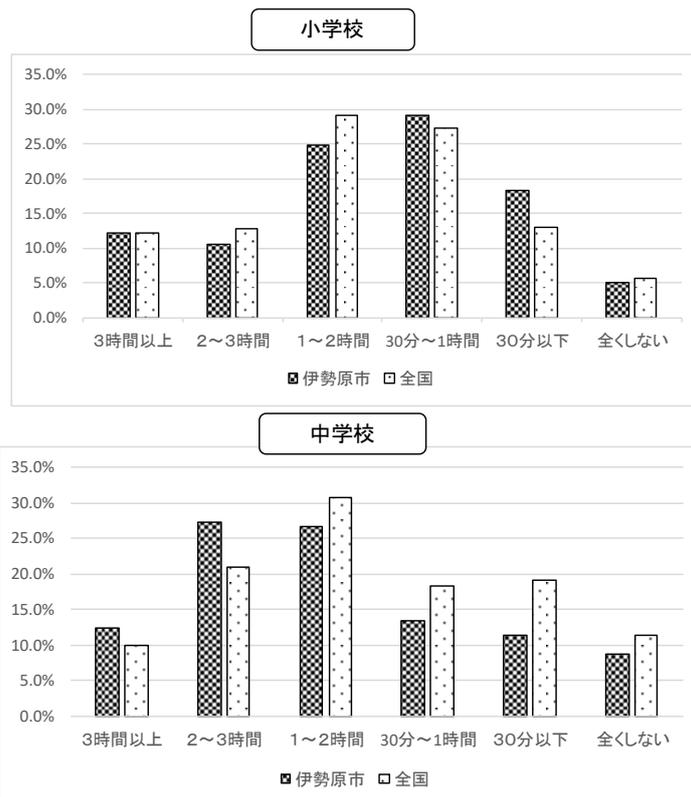
Q「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」



(2) 家庭学習に関して

- ・学校の授業時間以外で月曜日から金曜日についての1日あたりの勉強に充てる時間の割合は、小学校では全国と比較して大きな差はないが、昨年度と比較すると小学校では「3時間以上」の割合が増加した。中学校では全国と比較すると昨年度と同様、学習時間が2時間以上の割合が高い状態であった。
- ・家庭学習においては、学習時間のみを重視するのではなく勉強方法や学習課題が明確になることで、主体的に学習に取り組む意欲につながると考える。また、学校と家庭が連携を図り、学校の学びを家庭へつなげる指導や工夫も大切である。

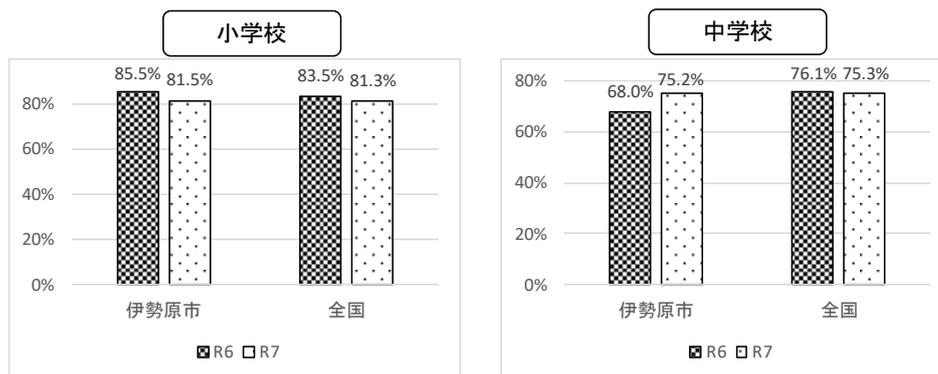
Q「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)」



(3) 地域や社会に関わる活動等の状況について

- ・「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と考える児童生徒の割合は、昨年度から小学校では4%減少し、中学校では7.2%増加した。
- ・今後も引き続き、地域や社会の魅力やよさを生かした学習活動だけではなく、地域や社会の抱える課題を見つけるなど、地域や社会に関わろうという意識を育むため、地域や家庭と連携をより図ることが必要である。

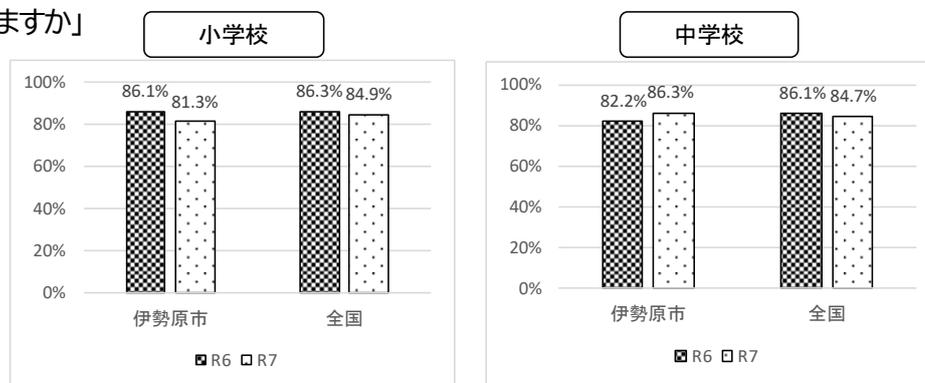
Q「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」



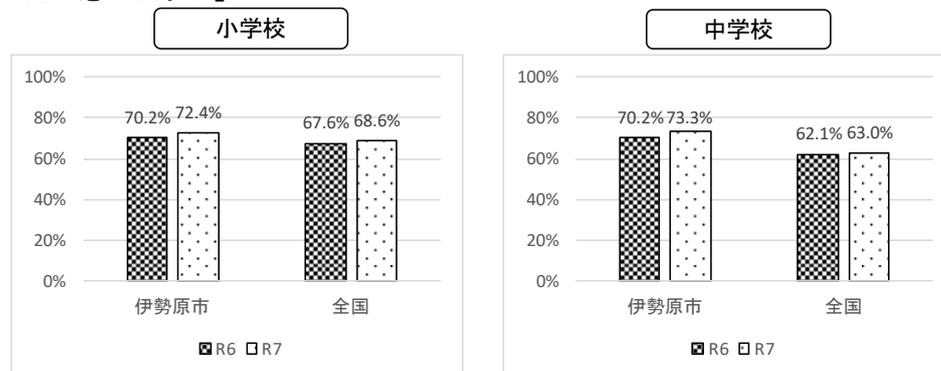
(4) 主体的・対話的で深い学びの視点から

- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができている」と感じている児童生徒の割合は、昨年度から小学校では4.8%減少し、中学校では4.1%増加した。引き続き、身に付けさせたい力を明確にし、意図的・計画的に他者と交流する活動を取り入れた授業を行うことが大切である。
- ・「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している」と感じている児童生徒の割合は、昨年度と比較すると小学校で2.2%、中学校で3%増加しており、全国と比較しても依然として高い。
- ・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と感じている児童生徒の割合は昨年度と比較して、小学校では3.6%、中学校で2.5%減少した。発達段階に応じた課題の設定や発問の工夫が重要であるとともに、解決の過程を振り返る活動等を通して、充実感や達成感が実感できるような場面の設定も大切である。

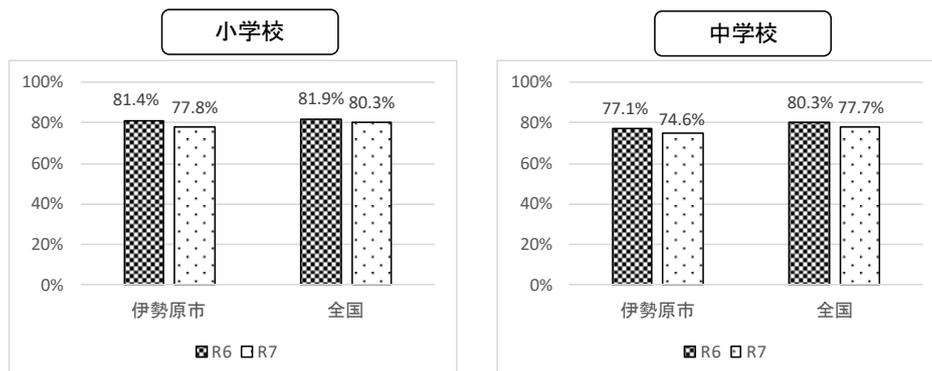
Q「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができていると思いますか」



Q「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか」



Q「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」

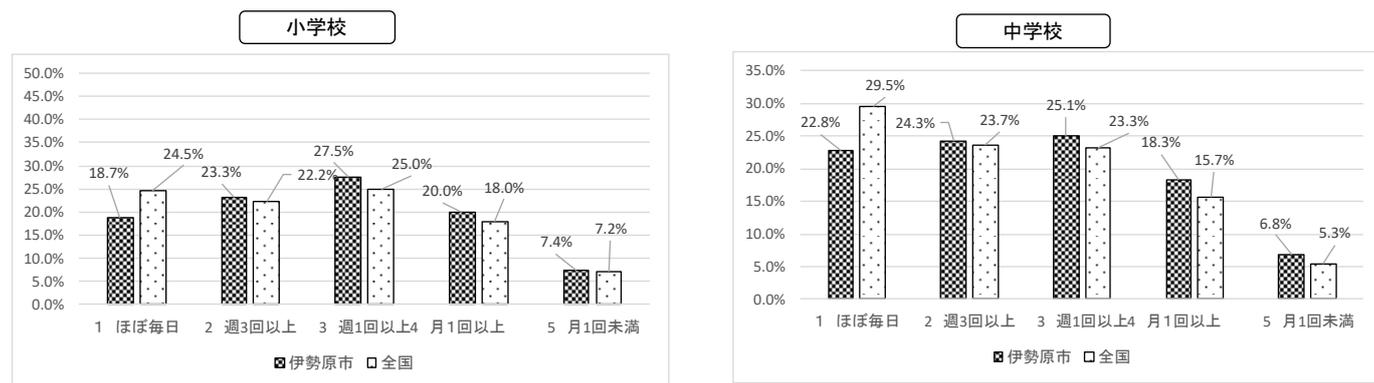


(5) ICTを活用した学習状況

・授業でのPC・タブレットの利用の頻度は、小学校では昨年度と比較すると、「ほぼ毎日」は2%増加し、「週3回以上」で18.2%、「週1回以上」で3.2%減少しており、週1回以上使用している数値は69.5%である。中学校では昨年度と比較すると、「ほぼ毎日」は4.1%増加し、「週3回以上」で15.8%、「週1回以上」で5.5%減少した。

・PC・タブレットは、黒板や紙、鉛筆、ドリルといった学習用具や教材の一つとして、児童生徒のよりよい学びにつながるよう、より効果的な活用を図っていくことが大切である。具体的には、知りたいことを調べる場面、他者と意見共有したり試行錯誤する場面、自分の考えをまとめたり発表したりする場面など、育みたい資質能力や児童生徒の実態や発達段階、教科の特性により工夫する必要がある。

Q「5年生(2年生)までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか」



3 児童生徒質問調査と教科に関する調査のクロス集計結果から

児童生徒質問調査の結果と教科に関する調査結果との関係を見ると、次のような児童生徒の方が、教科の正答率が高い傾向が見られました。

◇ 基本的な生活習慣等

- ・朝食を毎日食べている。
- ・毎日、同じくらいの時刻に寝ている。
- ・毎日、同じくらいの時刻に起きている。
- ・自分には、よいところがあると思う。

◇ 家庭学習のようす

- ・分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる。
- ・家に本がある(雑誌、新聞、教科書は除く)。
- ・新聞を読んでいる。

☆学習習慣を確立することは、その後の生涯にわたる学習に影響する極めて重要な課題であることから、家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方を促したりするなど家庭学習も視野に入れた指導を行う必要がある。

小学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2(1)

中学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2(1)

◇ ICT を活用した学習状況

- ・PC・タブレットなどの ICT 機器で文章を作成する(文字、コメントを書くなど)ことができる。
- ・インターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど)ことができる。
- ・PC・タブレットなどの ICT 機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができる。
- ・PC・タブレットなどの ICT 機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができる。

◇ 言語活動の充実、主体的・対話的で深い学びの視点

- ・5年生まで(中学校調査では「1、2年生のとき」)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた。
- ・5年生まで(中学校調査では「1、2年生のとき」)に受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。
- ・5年生まで(中学校調査では「1、2年生のとき」)に受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた。
- ・学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができている。
- ・学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。

☆主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解したり、未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができる。

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ 平成28年8月26日

☆学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通じた特色ある教育活動を展開する中で、・・(中略)・・児童・生徒に生きる力を育むことを目指すものとする。

小学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2

中学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2

4 学校がよりよい授業実践に向けて重視していきたいこと

各学校では、引き続き、次の点を重視し、全学年・全教科を通じて主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図る必要があります。

- ・知識及び技能の習得。
- ・習得した知識及び技能を活用して、思考力、判断力、表現力等の資質能力を育むこと。
- ・ICT機器の効果的な活用や個に応じた指導の充実を図ること。
- ・各学年・各教科の課題設定の工夫や言語活動の取組状況について職員間で情報共有を図ること。
- ・家庭との連携を図りながら、児童生徒が自主的に学ぶ力を育むために、学習計画の立て方や学び方について指導すること。
- ・本調査の結果を分析し、学校全体の教育活動の改善に生かすこと。
- ・引き続き、保護者や地域の方との協力・連携を進めること。

小学校各教科の課題（p 3）を踏まえた方策

小 学 校	国 語	<ul style="list-style-type: none"> ・「書く」の指導では、内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考える指導を充実させる。 ・「読む」の指導を進める上で、まずは読む目的を明確にする。複数の資料を結び付けて読む学習活動を設定し、それぞれの資料がどのような関係にあるのかを考えながら読む。その際、それぞれの資料にある、語句や情報を丸や四角で囲んだり、線などでつないだりするなどして、どの部分と結び付くのか視覚的に明らかにしながら読む指導を行う。
	算 数	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の資料から、目的に応じて、適切なグラフを選択して、データの傾向や特徴を捉え、判断できるようにする。 ・具体物を用いて、元の大きさとそれを分数にした大きさを直接比べて、その観察を通して、分数を確かめ、分数の表現を用いることができるようにする。 ・異分母の分数の加法の計算の際、分母を共通にすることによって、共通単位分数の幾つ分とみることで、整数の加法に帰着できることに気づくことができるようにする。
	理 科	<ul style="list-style-type: none"> ・ものづくりの活動について、問題解決の活動の一形態であることを意識し、児童が明確な目的を設定し、その目的を達成するために行う活動となるようにする。つくったものを動かし、構想したとおりになっているかを振り返り、修正するといった活動を通して、知識と知識、知識と具体物とを相互に関係付けて意味を捉えたり、図や言葉で表現したりしながら目的の達成具合や修正点の確認等を行うことで、学習内容を深めることができるように授業づくりを行う。 ・観察や実験を行う際には、条件制御の重要性や意味を確認し、条件を制御した場合の結果を見通しながら、予想や仮説を基に観察、実験の方法を計画するような授業づくりを行う。 ・自然の事物・現象を比較し、差異点や共通点を基に問題を見いだすことを意識した授業づくりを行う。また、見いだした問題等を言い回しや言葉を工夫しながら書き記したり、考えた過程がわかるように説明したりする等の活動を取り入れるなど、児童が表現できる機会を設けた授業づくりを行う。

中学校各教科の課題（p 4）を踏まえた方策

	国語	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の指導においては、字体、字形、音訓、意味や用法などの知識を習得し、文脈に即して漢字を正しく使うように指導する。 ・資料や機器を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫する際には、伝えたい内容が適切に伝わるよう効果的に資料や機器を活用できるよう指導する。 ・自分の考えが伝わる文章にするためには、意見とそれを支える根拠を明確にして書くことが重要である。伝えたい事柄とその根拠とを適切に結び付けたり、事実や事柄を具体的に示したりして書くように指導する。
中学校	数学	<ul style="list-style-type: none"> ・数学の用語の意味の理解については、用語が具体的な内容から離れ、形式的な指導に陥らないようにする。素数については、1は素数に含まれると考える生徒がいるため、その後の学習において素数を用いる際に、1は素数に含まれないことを再確認する場面を設定する。また、変化の割合については、xの増加量やyの増加量をxやyの値と捉える生徒がいるため、形式的に変化の割合を計算して求めることに偏らず、変化の割合を事象の考察やその表現に適切に用いることができるよう一次関数の表、式、グラフと関連づけて考える場面を設定する。 ・数学的活動を日々の学習に意図的、計画的に設定する。例えば、文字を用いた式を使って、ある命題が成り立つことを説明する場面を設定し、文字を用いて表現したり、文字を用いた式の意味を読み取ったり、証明に用いた前提や証明の根拠、結論を整理するなどして証明を振り返り、新たな性質を見いだす活動を取り入れるなど、数学的な表現を用いて説明し伝え合う活動を取り入れる。
	理科	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然の事物・現象から見いだした問題を解決するために、自ら課題を設定し、「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」の領域を横断して多面的、総合的に探究することで、理科を学ぶことの意義や有用性の実感を高める授業づくりを行う。 ・考察の妥当性を検討するために、観察、実験、その結果から考察を深めたり、観察、実験が難しい内容ではWeb ページなどの情報の信頼性を吟味したりして、適切に情報収集する。その際は、一つの情報だけを信頼するのではなく、複数の情報を参照して、信頼性を吟味する授業づくりを行う。 ・化学変化を質的・実体的な視点で捉えるために、化学変化における「反応する物質」と「生成してできた物質」を整理した上で、「化学変化の前後で原子の種類は変わらず、原子の数も変化しない」という知識を確認しながら、微視的に事象を捉えることができる授業づくりを行う。

5 家庭にお願いしたいこと

進んで学ぶ子どもを育てるために、家庭においても特に次の点について、ご指導をお願いします。

- ・ 規則正しい生活習慣を心がけましょう。
例) 早寝・早起き・朝ごはん、家庭学習や読書等の習慣 等
- ・ 家族で、学校や地域、社会での出来事、将来のことなどについて話題にしてみましょう。
- ・ 日常生活の中での「達成感」を大切にしましょう。
例) 家庭の中で子どもに役割を与えましょう。子どものがんばりをほめましょう。
- ・ ボランティア活動や地域の行事等と一緒に参加しましょう。
例) 公民館まつり、総合防災訓練、地区・学区体育祭などへの参加 等
- ・ テレビゲームや携帯電話・スマートフォン等の使い方について、話し合しましょう。
「スマートフォンの使い方 フォン当に大丈夫? ~STOP!! 1タップ~」
(令和3年度伊勢原市中学生からのスローガン)

伊勢原市教育委員会では、家庭学習の手引きとして、冊子『学びのすすめ』を作成し、学校を通じて家庭に配布しています。ぜひご活用ください。

参考 冊子『学びのすすめ』は、伊勢原市教育センターのウェブサイト内リンクリストからダウンロードできます。伊勢原市教育センターURL <http://www.isehara.ed.jp/center/>



事務担当は教育指導課
TEL 0463-74-5247 (直通)
FAX 0463-95-7615
E-mail: sidou@isehara-city.jp